

こんにちは！ 室長の工藤です。

昨年、100年前のスペイン・インフルエンザに関する新聞記事を探していたところ、感染症流行が下火になっていた時期に県内各地で盛んにマラソン大会が開催されていることに気づきました。しかも、当時の青森県ではマラソンがブームとなっていて、運動会等では花形種目でした。

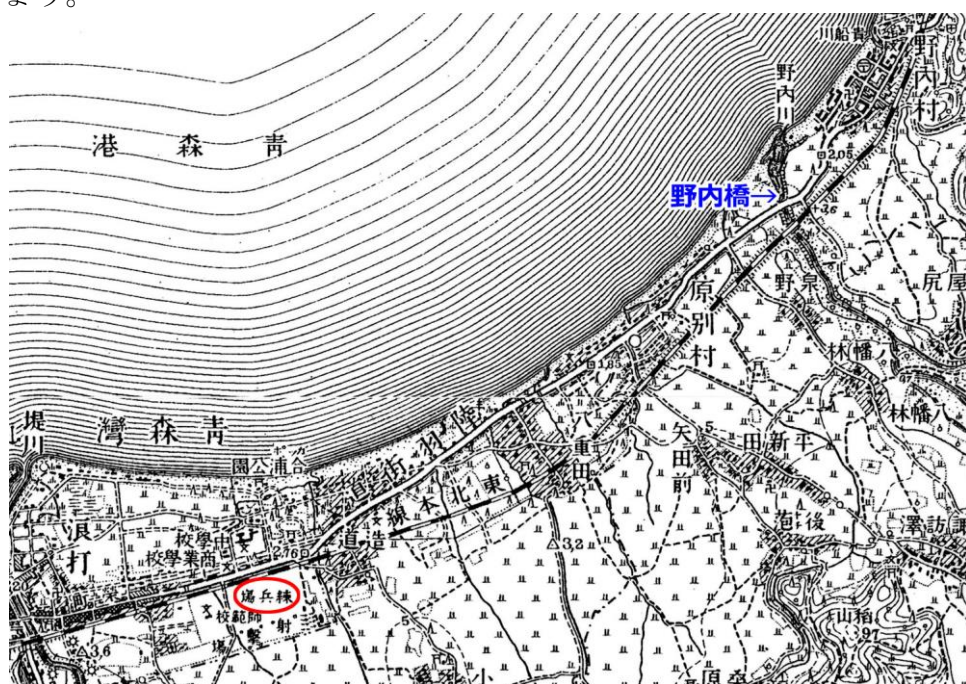
では、一体いつ青森県に「マラソン」がもたらされたのでしょうか。もっとも、当時の新聞紙上での「マラソン」の用例をみていくと、40km以上走るものもあれば、10km程度の距離でもマラソンと表記されることもあり、明確に定義されたものではないようです。

平成元年（1989）に青森県体育協会の編集・発行による『青森県体育協会史』（以下、『協会史』と略記）に、「青森県マラソン事始め」として大正7年（1918）7月9日に造道村の練兵場で開催された「東郡下の男子青年及び在郷軍人による陸上競技会らしきもの」でマラソンが実施されたことを紹介しています。今回は、この「陸上競技会らしきもの」を検証していくことにします。

まず、実施団体は東津軽郡青年団と在郷軍人会なのですが、青年団側のプログラムと在郷軍人会側のプログラムはそれぞれ異なっていて、「陸上競技会らしきもの」に参加したのは郡内の各青年団支部の青年たちでした。

また、青年団が実施した「競技会」は、マラソンなどの陸上競技のほかには相撲や草鞋作りなどがあり、さらに競技の始まる前には知事が服装・言動、教育の状況（教育勅語を覚えているかなど）の確認（検閲）をしています。ですから、全体としては鍛錬・修養の場であったとみられます。

さて、この競技会でのマラソンは、会場を出発し野内橋で折り返す「二里（約8km）マラソン」で、一着は大野支団の選手でタイムは35分でした。実はこの頃、県内の長距離走は郡部の青年団所属のランナーの独壇場でした。そうした猛者たちのタイムには及びませんが、まずまずの成績といえましょう。



二里マラソンのコース
（大正4年発行の五万分の一地形図「青森東部」「浅虫」より作成）

なお、マラソンは「当日第一の呼物」と評され、やはり当時の人気種目であったことがうかがわれます。ですから、『協会史』は「青森県マラソン事始め」と位置付けますが、これ以前にマラソンは実施されていたと見た方がいいと思います。実際、私が確認し得たところでは、大正6年6月に青森鉄道建設事務所が合浦公園から浅虫東奥館までのマラソンを実施しています。



東奥館
（青森県所蔵県史編さん資料）

最後に、この日の競技会では優勝支団に優勝旗が贈られました。これは、油川の町村長を務めた西田林八郎が寄贈したもので、同点優勝の油川と造道の支団に授与されました。



西田林八郎
（『青森市史』別冊人物編）